

# 藤村「処女地」に執筆した無名の女性達・目録

永 淵 朋 枝

## 序

島崎藤村が「婦人の眼ざめを期待し」<sup>(1)</sup>て創刊した婦人雑誌「処女地」(大<sup>11</sup>・4～大<sup>12</sup>・1、全<sup>10</sup>冊)に執筆したのは、どのような女性達だったのか。「処女地」は短命であり、作家養成雑誌ではなく、「処女地」が生んだ唯一の閨秀作家は鷹野つぎと言われてきたため、文学史において顧みられることはほとんどなかった。藤村研究の中でも研究は立ち後れている。<sup>(3)</sup>今年になって、紅野謙介「女性作家とメディア——『処女地』のひとびと」(『日本女性文学大事典』市子夏生・菅聡子編 日本図書センター 平18・1)、川端俊英『島崎藤村の人間観』(新日本出版社 平18・3)で取り上げられ、見直しの兆しが見えてきたところである。「処女地」の執筆者はどこから集まり、どこへ行ったのか、つまり「処女地」掲載作品の他にも作品を発表したのか、ということとはほとんど明らかにされていない。「処女地」終刊号に付けら

れた「附録 本誌執筆者別総目録」(以下「総目録」と記す)で執筆者四三名の大半の生年月と出身地がわかる。また、二〇名分の「主なる同人・誌友の略歴(大正時代を中心とする)」(笹淵友一・伊東一夫)が「処女地」復刻版(白帝社 昭42)に付された。さらに、『島崎藤村事典』(伊東一夫編 明治書院 新訂版は昭57・4)に、「処女地」を機縁として藤村と結婚することになる河口玲子(島崎静子：以下、カッコ内が事典類の人名項目での氏名)、川島つゆ、沢ゆき子(沢ゆき)、鷹野つぎ、浦野蕉子(徳光まつ子)、辻村乙未、長坂きくじ、星野耀子、三木栄子、横瀬多喜の一〇名の項目が立てられた。しかし、著作のある人は別として、これらの人々が「処女地」の他に発表した作品についての記述は無い。「処女地」に執筆した四三名の女性達のうち、一般に流布している文学関係の事典などに記載のある人は、以下の二一名である。『日本近代文学大事典』(全六巻 講談社 昭52・11～53・3)には、生田花世、鷹野つぎ、若山喜志子、池田こぎく(池田小菊)、

板倉とり子（若杉鳥子）、河口玲子（島崎静子）、川島つゆ、辻村乙未、細川武子の九名の項目がある。このうち、生田花世、池田小菊、鷹野つぎ、若山喜志子の四名は、『現代女性文学辞典』（東京堂出版 平2・10）、『日本女性文学大事典』（前出）にも項目がある。この他の人物では、沢ゆきの項目が『日本現代詩辞典』（おうふう 昭61・2）・『詩歌人名事典 新訂第2版』（日外アソシエーツ株式会社 平14・7）にあり、加藤みどりの項目が『青鞥』人物事典（110人の群像）（らいてう研究会編 大修館書店 平13）にある。これらの人々の中には、評伝などの参考文献のある人もいる。

では、これらの文学関係の事典などに記載のない残り三二名の無名の女性達は、「処女地」のみに執筆し、そのまま消えてしまったのだろうか。本稿では、これら三二名の人々が他誌に発表した作品などを掘り起こし、作品の目録を作成する。文学事典などに記載のある女性達については別に検討したい。「処女地」の性格を最もよく表すと考えられる無名の執筆者達を調査することは、藤村「処女地」の意義を明らかにするばかりではなく、大正時代に文芸を志した無名の女性達がどのような人生を送ったかの一端を明らかにする作業でもあるだろう。

目録は、「一」「処女地」以外の雑誌への執筆が明らかになった女性達、「二」「処女地」以外への執筆を確認できなかった女性達に分けて「総目録」掲載氏名の五〇音順に並べる。事典や「処女地」や藤村の談話によって、これまでに知られていたこと、掲載

事典名などを、氏名の下に略記する。目録中、執筆者に関する記述には＊を付し、執筆者の状況を知るために、簡単な内容を記す。著書には●を付す。執筆した文章が特集や欄の一部の場合は、特集名などを（ ）で囲み、「総目録」とは異なる執筆者名の場合には氏名を記す。「処女地」に関しては、「総目録」と同じく、「おとづれ」・「書架」欄掲載のものは入れない。「わたしたちの手帳」欄のものは「手帳」と付記し、作品名は本文中の題を記す。

## 【一】「処女地」以外の雑誌への執筆が明らかになった女性達

伊東英子 明<sup>23</sup>・1、仙台市光禪通り生。

赤い鳥 2・4 大8・4 「弱虫」

＊読売新聞 大8・11・17朝 「雑誌読んだまま」（作家伊東英子氏「行手に暗し」に、「望みのある見付けものをした様な気がする。之は泡鳴氏が氏としては極めて謙遜な『極め』を付けた作であるが、成る程斯うした死境に陥いつた婦人の心境を、可なり細かく、艶のある手法で描いて居る◇難を言へばこの技法が『枯れ』て来なければならぬ、之れでは余りに投書的な、『見て呉れ』と、無用な色彩と『身振り』の誇張に満ちて居る」（十一月の内外時論）

赤い鳥 4・3 大9・3 「狐の片耳」

赤い鳥 4・6 大9・6 「朝顔」

赤い鳥 5・5 大9・11 「喧嘩のあと」

＊読売新聞 大10・8・14朝 「十日会々員の大磯行」（「会

する者有島生馬氏を初め小寺健吉、渡平民の両氏夫妻、秀しげ、伊藤英子、三浦乙女の三夫人、仲木貞一、生田葵」など、「主人三島章道氏夫妻の歓待を受け楽しい半日を持った」

赤い鳥 8・6 大11・6

「洗礼」

処女地 4 大11・7

「寂しい春」

処女地 5 大11・8

「迷へるもの」(随筆)

処女地 6 大11・9

「秋草」(小品)

処女地 6 大11・9

「研究座の『かもめ』を観た

夜」(手帳)

処女地 7 大11・10

「銀座にて」(手帳)

処女地 8 大11・11

「凍った唇」

処女地 9 大11・12

「窓の顔」(感想)

処女地 10 大12・1

「蓄音機」

処女地 10 大12・1

「処女地」よさようなら!!

処女地 10 大15・1・5

大山泰夫「寅の文士と画家

時事新報

(四)「寅年の歌人は妙に女ばかりで十一年生れの与謝野晶子と二十三年生れの茅野雅子、伊東英子の三人だ」「伊東英子の名は近頃余り聞かぬが何うして居るか」

『女性文学の近代』(女性文学会編 双文社出版 平6・4)に、「処女地」掲載の「凍った唇」採録。

\*『女性文学の近代』(女性文学会編 双文社出版 平6・4)に、「処女地」掲載の「凍った唇」採録。

\*『女性文学の近代』(女性文学会編 双文社出版 平6・4)に、「処女地」掲載の「凍った唇」採録。

\*『女性文学の近代』(女性文学会編 双文社出版 平6・4)に、「処女地」掲載の「凍った唇」採録。

\*『女性文学の近代』(女性文学会編 双文社出版 平6・4)に、「処女地」掲載の「凍った唇」採録。

http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/guest/novel/houeiko.html (平18・11・30閲覧)

今井喜美子 明33・6、新潟県南蒲原郡大崎村生。(同一人物と

確定できていない)

処女地 3 大11・6

「遠き地に嫁せる友に送

る」

週刊朝日 35・4 昭14・1・15

「私の健康法 山がおくす

り」(写真入り)

朝日新聞

昭8・12・27朝 「はじめての女性へ／ス

キー手ほどき」(「東京山岳会の会員、今井喜美子さん」に身支

度を聞く。写真入り)、「ズボンなどは男のお古でよし」

朝日新聞

昭13・6・26朝 「思ひ出深い夏山 裏穂高」

朝日新聞

昭14・10・5朝 「秋山を想ふ 蓼科」

浦野薫子(徳光まつ)

明32・5、横浜市市中村町生。日本女子大卒、

発病のため「処女地」編集を辞任、大阪の実家に帰り、結婚して

福西から徳光姓に。島崎静子「ひとすじのみち」に「処女地」時

代の記述がある。『島崎藤村事典』

処女地 1 大11・4

「母のもとへ」(手紙)

処女地 1 大11・4

「荒野の歌」(手帳)

処女地 3 大11・6

「花の言葉」(小品)

処女地 4 大11・7

「緑の窓」(随筆)

処女地 10 大12・1

「雨の夜」

処女地 10 大12・1

「折にふれて」

藤村研究風雪

5 昭42・9

福西マツ「『処女地』の思

出

大井さち子

明37・6、相州葉山一色別荘生。最年少の同人。

処女地

1 大11・4

「兄へ」(手紙)

処女地

2 大11・5

「旅人の歌へる」(詩)

処女地

3 大11・6

「詩」

処女地

3 大11・6

「花の言葉」(小品)

処女地

4 大11・7

「詩」

処女地

4 大11・7

「指輪」(手帳)

処女地

5 大11・8

「覆水」(詩)

処女地

6 大11・9

「郊外の家より」(隨筆)

処女地

7 大11・10

「詩」

処女地

7 大11・10

「刺戟のまゝに」(手帳、青

い鳥

7 大11・10

「觀劇」

処女地

8 大11・11

「詩」

処女地

8 大11・11

「或る人の言葉に」

処女地

9 大11・12

「詩」

処女地

10 大12・1

「追憶」(詩)

文芸公論

1 12 大12・12

「潮の香・草の香」海！

海？海！！

1 2 大12・8

「多方面恋愛座談会」

女人芸術

1 3 大12・9

「男性訪問1」(里見弴)

創作月刊

1 10 大12・11

「秋晴れ小景」

創作月刊

2 1 大12・1

大井幸子「推奨する新人」

(回答)

新潮

1 大12・1

「近代人の享楽生活」近代

人の享楽姿態

1 大12・1

「動いてゐる風景」移動風

新潮

1 大12・2

「紅子の love affair」

景

1 大12・2

「霧の中の恋」

女人芸術

2 2 大12・3

「たからなる人に」

文章俱樂部

14 3 大12・3

「月光とアラベスク」ある

詩神

5 5 大12・5

「紙風船・人形・メトロ」

夜、あまりにロマンチックな...

1 2 大12・5

「ライラック綺譚」

近代生活

1 4 大12・7

「電話の声」

女人芸術

2 8 大12・8

「『男』に就ての漫談会—

新潮

1 9 大12・9

「新東京十二時」

文学時代

1 5 大12・9

「恋愛の新座標」未解決の

新潮

1 3 大12・3

「神々の戯れ」

ブレバライト

1 3 大12・3

「小遣帳しらべ」(回答)

近代生活

3 8 大12・8

「城夏

尾形明子『女人芸術の人びと』(ドメス出版

56 11 大12・11

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

子」の章に「里見弴との対談でセンセーションを巻き起したモ

ダンガール」「処女地」「女人芸術」に新感覚派的作品を発表した葉山生まれの『ガラスの破片のような美しさ』（川瀬美子談）を持った女流作家」とある。

織田やす子 明16・12～昭22。島根県八束郡生馬村生。教育家。

東京女子高等師範学校卒業後、プール女学校、神戸女学院教師などを歴任。大正五年渡米、オベリン大学・大学院で聖書文学専攻、八年帰国。昭和五年まで神戸女学院専門部及び神戸女子神学校教授、恵泉女学院の教師など。賀川豊彦の「覚醒婦人」主筆。自作の詞や訳詞が『讃美歌』（昭6）に収録、現行日本基督教団『讃美歌』（昭29）には訳詞「ほめたたえよ」（79番）など四編採録。『日本キリスト教歴史大事典』教文館 昭63・2。愛媛県生とある。」

処女地 1 大11・4 「長い沈黙の後、ある親しい友へ」（英文）

処女地 2 大11・5 「私の文芸に就いて感じた事」

処女地 3 大11・6 「めざめの一步」

\*処女地 4 大11・7 本号のために織田やす子が書いた論文「政治的幻影」は時事問題に触れるので割愛した、とある。

処女地 5 大11・8 「朝夕の祈り」

処女地 6 大11・9 「消息」

処女地 8 大11・11 「朝夕の祈り」

処女地 9 大11・12 「朝夕の祈り」

処女地 10 大12・1 「朝夕の祈り」

婦人 11 大13・12 「織田やす「象牙の塔から」

婦人 12 大14・1 「織田やす「私の新聞紙に  
対する意見と希望」問はるゝまゝに」

婦人 13 大14・1 織田やす「第一輯を手にして」

婦人 14 大14・2 織田やす「北村兼子サンの  
「娼婦運動を瞥見して」といふ稿を読み」

婦人 15 大14・3 織田やす「沈黙の群れにつ  
いて——覚醒婦人協会より見たる女子労働運動私見」

婦人 16 大15・12 織田やす「第八回全関西  
婦人連合大会代表者の感想」思想問題懇談会の弁明

婦人運動 17 大15・2 「感情の感情論を警戒せよ」

婦女新聞 1746 昭8・11・26 「家庭の平和 恵泉学園 織  
田やす子」

婦人新報 433号 昭9・4 「春・復活・卒業」

・「覚醒婦人」に多数執筆していると考えられるが、所在不明のため未見。

河井稲子 明34・11、東京市牛込区早稲田町生。河井醉茗の娘。

文章世界 14 大8・11 「文叢 通信」（投稿）

文章世界 15 大9・11 「文叢 短歌」（投稿）

＊読売新聞

大11・1・11朝

「純真な若い婦人の手で／  
営まれる『処女地』／新時代の婦人の思想向上と共に／文化運動に資する雑誌の創刊／文章は全部手紙体で」（最終段「河井いね子嬢が星の様な瞳を輝かせて其動機を語る」に、「父の勧めで『処女地』の人となりましたので余暇には仏語もやり度い希望です」とある。「此の春四月創刊される『処女地』の一同人……河井いね子さん」のキャプションで写真入り）

処女地

1 大11・4

「手紙」

処女地

1 大11・4

「露西亜文学講話」を読み

て（手帳）

処女地

2 大11・5

「田舎の姉へ」

処女地

3 大11・6

「夕食」

＊時事新報

大11・6・20

「牧野信一」「海浜日誌」六月

創作評Ⅱ（七）（『処女地』に出てゐる河井稲子氏の『夕食』といふのは、ほんの短いものだがつかまへどころに妙味がある。たゞ終ひのあたりでとどころ、自分だけの感情に走つてゐるのを露骨に現してゐるのが、折角のすつきりした全体の印象を濁してしまつた）

処女地

5 大11・8

「断片」（感想）

読売新聞

大14・10・5朝

「秋」（月曜付録欄）

読売新聞

大14・11・2朝

「子から見た父」

読売新聞

大14・11・30朝

「現代日本詩選」を読む

（月曜付録欄）

日本詩人

5 11 大14・11

「とその思ひ出」父のこと

日本詩人

6 1 大15・1

文章倶楽部

11 3 大15・3

日本詩人

6 3 大15・3

日本詩人

6 3 大15・3

読売新聞

大15・5・17朝

読売新聞

大15・8・11朝

女人芸術

1 2 昭3・8

いとほしむ

婦選

11 7 昭12・7

婦選

11 9 昭12・9

婦選

13 3 昭14・3

＊島本久恵『長流六〇八』（昭37・1〜3）に河井稲子についての記述あり。

の記述あり。

故砂原芳子

明29・8〜大7・4。山梨県巨摩郡上手村生。師範学校女子部卒。ツルゲーネフやドストエフスキーを愛読した。病死。（同一人物と確定できていない）

死。（同一人物と確定できていない）

文学世界

20 7 大9・7

処女地

2 大11・5

一節）

処女地

4 大11・7

処女地

4 大11・7

処女地

4 大11・7

処女地

4 大11・7

処女地

4 大11・7

処女地

4 大11・7

「河井醉茗氏の五十年誕辰

「夕べ」

「母を歌へる」（短歌）

「（女性と詩作）」

「詩集『生命の花』」

「初夏の頃」（月曜付録欄）

「灯をつけない室」

「潮の香・草の香」生命を

「白ダリア」（短歌）

「烟」（随筆）

「海南島占領に寄す」（詩）

「砂原よし子」「風の音」

「現代思潮と女性」（遺稿の

「砂原芳子の遺稿（若し女

「砂原芳子の遺稿（若し女

「砂原芳子の遺稿（若し女

「砂原芳子の遺稿（若し女

「砂原芳子の遺稿（若し女

「砂原芳子の遺稿（若し女

「砂原芳子の遺稿（若し女

「砂原芳子の遺稿（若し女

「砂原芳子の遺稿（若し女

「砂原芳子の遺稿（若し女

も人間であるなら」

高橋元子 明35・2、東京府北多摩郡小平村生。東京女高師在学中であった。

婦人画報

大9・3

「懸賞論文」現今の『高等

女学校』を論ず（三等金二十円進呈）東京高橋元子

処女地

1

大11・4

「友に」（手紙）

処女地

2

大11・5

「詩」

処女地

3

大11・6

「心の芽」（感想）

処女地

4

大11・7

「詩」

＊読売新聞

大11・8・21朝

「才媛の群がる『処女地』

の同人中에서도／最年少の閨秀作家／お茶の水高師生の高橋元子

さん」（写真入り。「中渋谷の実業家高橋元吉氏の令嬢」一一歳、

お茶の水高師で英文学を専攻する四年生、「京都大学文科の教

授波多野精一博士の指導を受けて哲学の研究」もしている、「卒

業後は帝大へ行きたい」が「どうなりますか」

処女地

6

大11・9

「生命の奏曲」

処女地

7

大11・10

「生命交響楽の一部」

処女地

8

大11・11

「詩」

処女地

9

大11・12

「詩」

処女地

10

大12・1

「詩」

＊時事新報

大13・9・30

「教壇の詩人／ニイチエと

ストリンドベルグが／好きな高橋元子さん／をんなの国（十

五）」（写真入り。「『処女地』を手にした人は、高橋元子の名を知つてゐるだらう」「今は麹町高女の英語科教諭」「書きかけの小説と戯曲がございしますが」「何分未熟なものでございますから」）

田尻稲子

明33・9、神奈川県三浦郡浦賀町生。

＊読売新聞

大11・6・27朝

「藤村氏の推称した詩／『若

葉の世界』の作者／田尻中佐の令嬢稲子さん／図書館で詩を勉強

（「雑誌『処女地』に輝く詩人＝田尻稲子さんのキャプションで写真入り。以前から藤村の教えを受け、詩『若葉の世界』

は藤村や多くの読者の賞賛を博した、河井醉茗『彌生集』に跋

を書き、『炬火』にも発表）

炬火

1

大10・11

「小さなもの（味噌汁、雀）」

炬火

1

大10・12

「視痕」

炬火

2

大11・1

「冷感（冷感、『淋しさ、

心を盗む、恐れ）」

炬火

2

大11・2

「古巣へ」

炬火

2

大11・3

「黒い糸」「わな」

処女地

1

大11・4

「詩」

処女地

1

大11・4

「思凡のこと」（手帳）

処女地

2

大11・5

「詩」

処女地

3

大11・6

「若葉の世界」（詩）

処女地

3

大11・6

「花の言葉」（小品）

炬火 2 6 大11・6 「新しき緑草」「海の瞳」

処女地 4 大11・7 「亡き友へ送る」(手紙)

処女地 5 大11・8 「詩」

処女地 6 大11・9 「詩」

処女地 7 大11・10 「風に吹かれる草」(詩)

炬火 2 9 大11・10 「こぼれる雨」「月のかさ」

処女地 8 大11・11 「詩」

処女地 9 大11・12 「詩」

処女地 10 大12・1 「詩」

炬火 3 1 大12・1 「陽光礼讃」「秋雨」

女人芸術 1 2 昭3・8 「夕の丘」

詩神 6 1 昭5・1 「燃える石炭」「街頭にて」

女性時代 3 8 昭7・8 「流水」「水甕」

塔影 213 昭61・6 「松林」

・前二作品の間、河井醉茗主宰「女性時代」(15・3 昭19・3)

後続誌「塔影」(1号 昭24・4 213号 昭61・6)に、田

尻稲子はほぼ毎号作品を掲載しているが、紙面の都合上、これ

は略す。

・「島崎先生のこと」「処女地」のころ——(『日本文学全集 3

島崎藤村』武者小路実篤ほか編 河出書房 昭42・9)

●『一つの灯』(塔影詩社 昭61・10)

長坂きくじ (『総目録』の「長阪」は誤植) 明28、長野県生。松

本女子師範卒業後、県内の小・中学校を歴任。神津猛を通して藤村に文章の指導を請うた。『破戒をめぐる藤村の手紙』の編集に協力。『島崎藤村事典』

処女地 1 大11・4 「友に」(手紙)

処女地 5 大11・8 「いかに婦人は労苦しつゝ

あるか(母に)」

処女地 7 大11・10 「ある女の手紙」

処女地 9 大11・12 「林檎畠のスケッチ」

処女地 10 大12・1 「京都の師に送る」

女性改造 3 8 大13・8 「林檎畠のスケッチ」(小説)

藤村研究風雪 4 昭41 「私の藤村像」(文末に「旧

『処女地』同人」とある)

\*島崎楠雄・神津得一郎編『破戒をめぐる藤村の手紙』(昭23・7)

神津得一郎の「あとがき」に「編輯の一部を手伝っていたとい

た長坂きくじ様の御苦心を私は忘れることは出来ない」とある。

野村千代 (『総目録』に生年月などの記載なし、同一人物と確定  
できていない)

文章世界 15 11 大9・11 野村千代子(『文叢 俳句』

(投稿、「牛の尾の少し動きて秋寒し」)

処女地 3 大11・6 「姉の手紙」

処女地 4 大11・7 「或る夫人の話」

処女地 5 大11・8 「濱邊の冬」



処女地	9	大11・12	「丁さん」
処女地	10	大12・1	「君子をつれて」
埴原久和代	明12・8	昭11・9	甲斐国中巨摩郡源村生。洋画家。東京女子美術学校西洋画科を卒業、のち中村不折に師事。女流画家で最初の二科会会友となる。大正五年日本美術家協会に入会、昭和六年甲斐美術協会設立。晩年は鎌倉円覚寺前に転居して信仰生活。「芳賀登ほか監修『日本女性人名辞典』日本図書センタ― 平5・6」
婦女新聞	917	大6・12・14	「お国自慢」甲斐は寂しき美しき」(談話 写真入り)
文章世界	13	大7・10	「少女」(口絵)
*読売新聞	大8・8・29朝		「絵三味に入れる／埴原女史の生活／二科会に『娘』を出品して／入選の名譽を担ふ」
解放	大8・12		「静物」(創作画)
婦人画報	167	大9・1	「真綿を巻ける少女」(口絵)
*婦人画報	大9・3		小寺菊子「朱葉会展覧会を終つて―高安やす子様におくる―」(埴原様のあの華やかな明るい色彩は誰の目をも喜ばせたようでした)
*読売新聞	大9・8・29朝		「洋画は日本画と違つて／肉体の労働です／婦人の洋画家では僅か四五人が／一般のレベルに入れられる位／二科会審査員 石井柏亭氏談」(「今年も埴原久和代様が閨秀の唯一人として入選」)
婦人画報	176	大9・9	「最も楽しかつた悲しかつた幼時の思ひ出」(回答)
婦人倶楽部	1・2	大9・11	「心の行方」(口絵)
婦人倶楽部	2・6	大10・6	「画家の観た男子の肉体美と女子の肉体美」
婦人画報	188	大10・9	「未婚者より」(二) 自分の事業と結婚したい」
主婦之友	大10・11		「座せる女」(画)
主婦之友	大11・1・15		「夫として何ういふ男を望むか／妻として何ういふ女を望むか」(四) 女を生かして行くほどの男子を」
主婦之友	大11・2・1		「私は何故結婚しないか」
(回答)	大11・3		「私の趣味として」 絵画の
婦人画報	195	大11・3	「花の言葉」(小品)
処女地	3	大11・6	「忘れぬ夏の旅 清く艶めく尼僧」
週刊朝日	2	夏期特別号	「旅館の茶代・女中の心付をどうするか」(回答)
主婦之友	大11・8		「秋草」(小品)
処女地	6	大11・9	「壺に挿された花」(口絵)
女性日本人	3・9	大11・9	

太陽	28	12	大 11・10	「二科会の作品」女の胸像
(口絵)				
週刊朝日	3	1	大 12・1・1	「炉辺の大晦日 甲州の山
地風習」				
*女性日本人	4	1	大 12・1	「(附録)現代婦人録」
婦人公論	8	4	大 12・4	「われらは飢ゑてゐる(今
日我等女性は一				「回答)
女性	3	6	大 12・6	「午後はモデルを相手に」
週刊朝日	4	2	大 12・7・5	「馬場先門を望む」(画)
主婦之友			大 12・7	「涼しい旅の思出」ひと夏
の僧庵生活」				「(紀行文と画)
週刊朝日	4	17	大 12・10・10	「むさし野」(画)
婦人倶楽部	5	1	大 13・1	「新進花形婦人 苦心の成
功自叙伝」				「思はず恍惚見とれた美婦人」
女性改造	3	4	大 13・4	「れんげう」(表紙画)
週刊朝日	5	15	大 13・4・5	「一切を芸術に任せ切る」
週刊朝日	5	19	大 13・4・27	「書齋に坐つて」(写真入り)
女性改造	3	5	大 13・5	「象んどう」(表紙画)
女性改造	3	6	大 13・6	「矢車草」(表紙画)
週刊朝日	6	1	大 13・7・5	「真清水の匂ひ」
主婦之友			大 13・8	「お化粧 主婦之友絵」こよ
み」(画)				「最近の我国の実状に鑑みて 家庭の経済生活を何
うするか?」				
婦人世界	20	2	大 14・2	「東西花形婦人の打明話」
恋もなき悔もなき私の独身生活」				「写真入り、結婚に失敗後、
女子美術学校入学)				
主婦之友			大 14・3	「婦人ゴシップ」
週刊朝日	7	14	大 14・3・29	「竹林昼飯」
*主婦之友			大 14・4	「藤原英比古」(漫画記者が
行商人に化けて名流婦人の玄関めぐり」				
*主婦之友			大 14・5	「素人に出来る骨相判断
法」				
週刊朝日	8	1	大 14・7・1	「楊弓を引く頃」
婦人倶楽部	6	7	大 14・7	「処女主義」について
修道女の如く」				
婦人公論	10	8	大 14・8	「婦人の眼に映る男子の長
髪」人・形・調和の美」				
週刊朝日	9	4	大 15・1・17	「正月」(写真入り)
*読売新聞			大 15・8・11朝	「二科院展近し(十四) 病
後の努力」二科の埴原久和代氏」(写真入り)				
*女性	10	3	大 15・9	「女流画家アトリエ巡り」
(写真入り)				
婦人公論	12	1	昭 2・1	「柿」(画)
週刊朝日	11	22	昭 2・5・15	「雨の水戸行き」
婦人世界	22	10	昭 2・10	「初秋」
読売新聞			昭 3・4・19朝	「近頃私が愛読して居るも

の」各方面名家の回答(十一)「(メレチコフスキー『先覚』ロマンローラン『ジャンクリストフ』伝記小説など。雑誌はアトリエ、みづゑ、改造、女性、アラ、ギ、人間創造、ゆく春、演劇改造、演芸画報など「寄贈されたりしますのを」)

婦人世界 23・10 昭3・10 「独り静かに想念に耽る心の糧」

女人芸術 1・1 昭3・7 「夏の香」(表紙画)

アルト 6 昭3・10 「牡丹」(短歌)

\*婦人画報 282 昭4・1 「姓名秘録 名前から見た

知名婦人の今年の運勢」

女人芸術 2・9 昭4・9 「夜中の訪問者」

婦女新聞 1546 昭5・1・26 「現代女流芸術家の素顔

(四)「写真入り。『婦女新聞』等に「ずっと以前には何かと

ゴチャ／＼書いた」

\*『昭和大典記念 日本婦徳の鑑』(東京婦人新聞社編・刊 昭

6・12、「日本女性人名資料事典 第1巻」日本図書センター

平18・3 所収)に「埴原久和代」の項あり(「今や東都画壇

に於ける関秀画家としての一大権威」)

\*朝日新聞 昭6・12・22夕 「埴原久和代女史宅全焼」

\*読売新聞 昭6・12・22夕 「原宿」(全焼の記事)

家庭 2・1 昭7・1 「口絵、無題」

家庭 2・10 昭7・10 「インタヴュー・ヴァライエ

ティ」 悟りへの動機」

\*読売新聞 昭11・9・16朝 「埴原久和代女史」(元駐

米大使埴原正直氏令妹、二科会々友。脳溢血のため一五日逝去。

享年五八。女史は二科創立と同時に入選、日本洋画壇最初の関

秀画家であり、晩年は失明の為、信仰に生きてゐた)

\*朝日新聞 昭11・9・16夕 「埴原女史逝く」(日本洋

画壇最初の関秀画家。女流最初の二科会友。晩年は失明と自宅

の焼失で遂に絵筆を断ち、鎌倉円覚寺の管長であつた太田常正

氏の教導により信仰に生きていた)

林真珠 「総目録」の「真珠」は誤植) 明35・4、広島県御調

郡奥村生。

処女地 5 大11・8 「たそがれ」(小品)

週刊朝日 4・9 大12・8・19 「乞食の夢」(童話)

週刊朝日 4・17 大12・10・10 「夜盗」

週刊朝日 5・1 大13・1・1 「鯉になつたなまけ者」(童

話) 「もぐらもち」(童話)

週刊朝日 5・2 大13・1・6 「ふしぎな刺青」(童話)

週刊朝日 5・14 大13・3・30 「地主と三人の乞食」(童話)

週刊朝日 5・21 大13・5・11 「蝕ばまれた日陰者」(小説)

週刊朝日 5・26 大13・6・15 「月に吠えるもの」(童話)

週刊朝日 6・6 大13・8・3 「笛を吹いて歩く旅の男の

話」(童話)

週刊朝日 6・17 大13・10・12 「一本すゝきと赤とんぼ」

週刊朝日 8・15 大14・10・1 「女郎蜘蛛」(写真入り)

\*読売新聞 大15・4・26夕 「のろけを映画に残したさに?／二人の仲をシナリオに書き／作家林真珠さんの吾嬬入り」(写真入り)「女流作家」林真珠さんは「取つて二十七」で

「吾嬬撮影所の花形の山本嘉次郎君」と恋仲であつたが、山本君の紹介で撮影所入りし、長崎武君原作の悲喜劇「父さんの売物」を主演撮影中、山本君は監督である。「真珠嬢才筆を振つて『都会の横顔』となん題したシナリオを書き上げ」たが、「ラヴシンの連続で」「山本君と共演で映画になつたら大変と」キネマ雀がやかましい」

解放 5・6 大15・6 林真珠「歯痛」

週刊朝日 10・4 大15・7・18 「しらつか・しゅん」(小説)

週刊朝日 10・5 大15・7・25 「くらげの青助」(童話)

週刊朝日 10・18 大15・10・17 「対岸の風景」

文章倶楽部 11・10 大15・10 「ひとつの挿話」

本多たけ 明35・1、東京市麻布谷町生。「処女地」第一―三号「おとつれ」欄に、本多はる子とともに「谷町より」を寄せている。本多はる子の妹。足袋屋の姉妹「主なる同人・誌友の略歴」。

処女地 4 大11・7 「街」(小品)

処女地 6 大11・9 「真昼」(小品)

処女地 8 大11・11 「雨の日」(小品)

処女地 9 大11・12 「歩む街」

処女地 10 大12・1 「手紙」

女性改造 3・10 大13・10 「避暑地(入選)」

\*女性改造 3・10 大13・10 島崎藤村「選後に(第二回募集小説を読みみて)」(作者の謙讓がまず目を引く。創作の邪魔

になるくらいの学問はほんとうの学問になつていない。出来るだけ勉強することを勧めたい。)

三宅せい子 明13・9、東京市牛込矢来町生。

新小説 13・8 明41・8 附録「一顆涼 第一」(回答)

処女地 4 大11・7 「病院の夜」(小品)

処女地 6 大11・9 「断片」(小品)

処女地 9 大11・12 「小品」

読売新聞 大13・9・14朝 「パリにての昨今(一)」(写

真入り。以下、「三宅克己画伯夫人 三宅せい子」とある)

読売新聞 大13・9・16朝 「パリにての昨今(二)」

読売新聞 大13・9・17朝 「パリにての昨今(三)」

読売新聞 大14・2・13朝 「異国の井戸端会議の話題

にされて(上)」(寄稿「南フランス、カニユーで」とある)

読売新聞 大14・2・14朝 「異国の井戸端会議の話題

にされて(下)」(同)

茂木由子(茂木よし子) 明17・12、東京深川区御船蔵前町生。

歌人で、歌集に『砂のくづれ』がある「主なる同人・誌友の略歴」			女性日本人			「近代婦人と哺乳」(回答)		
婦女新聞	919	大6・12・28	「一人づゝに教へて」			「婦人界教育界」茂木女塾		
*読売新聞		大9・10・16朝	赤い煉瓦に囲まれた／茂木塾の女主人／学校へ行く生徒と結婚迄の間の／心の準備をする娘さん達を預つて／歓語が終日窓を洩れる(お茶の水出身で、五年前から塾をしている。主人が亡くなつて子供が三人。故大和田建樹氏に十五歳の少女時代から私淑してあらしつて和歌に堪能)			友への手紙		
読売新聞		大9・11・26朝	「時雨降る日」(短歌)			「睡眠及び休息の研究」		
女性日本人	21	大10・1	茂木よし子「山の灯」			歌		
婦女新聞	1080	大10・1・30	「灰のくづれ」			歌		
女性日本人	23	大10・3	「春の雲」			「心中の新しい見方」幼		
女性日本人	24	大10・4	「長ちやんへ」			歌		
婦女新聞	1095	大10・5・5	「鈴の音」			東北の旅より		
婦女新聞	1097	大10・5・29	総ては自分から			北海道の旅にて(歌)		
女性日本人	27	大10・7	「夏の風物」土用干			歌		
*読売新聞		大10・11・15朝	「よみうり抄」茂木由子			「けふといふは何の別れぞ」		
史 新著歌集『砂のくづれ』大日本文華会社から近刊			処女地			「附録」現代婦人録		
●歌集『砂のくづれ』大日本文華会社から近刊			処女地			「下町の家」		
婦女新聞	1126	大10・12・18	「砂のくづれ」(短歌)			茂木由子作歌・萩原英一作		
*読売新聞		大10・12・25朝	「歌集砂のくづれ」(紹介)			曲「童謡 かけくら」		
*婦女新聞	1128	大11・1・1	「バ、さんとしての高橋是清氏」(談話)			幼児の教育		
			女性日本人			31		
			*婦女新聞			1133		
			入塾受付			大11・2・5		
			女性日本人			34		
			処女地			大11・4		
			処女地			1		
			処女地			大11・5		
			処女地			2		
			処女地			大11・7		
			処女地			4		
			女性日本人			大11・8		
			38			大11・8		
			(五六名の回答)			「睡眠及び休息の研究」		
			処女地			6		
			女性日本人			39		
			稚な安価な死			大11・9		
			婦女新聞			1164		
			処女地			大11・10		
			処女地			7		
			処女地			8		
			処女地			大11・11		
			処女地			9		
			処女地			大11・12		
			処女地			10		
			*女性日本人			41		
			女性日本人			4臨		
			幼児の教育			237		
			曲「童謡 かけくら」			大12・7		
			238			大12・8		
			大12・8			茂木由子作歌・萩原英一作		

- 曲「童謡 大きなお日様」
- 婦女新聞 1231 大13・1・13 「(児童劇に対する批評賛否)」(回答)
- 婦女新聞 1234 大13・2・3 「やつぱり自己の建設から」(1229号 大13・1・1「震災後の決心と覚悟」のうち、茂木由子の回答がここに掲載)
- 幼児の教育 24 3 大13・3 「たこ」(童謡)
- 婦女新聞 1262 大13・8・17 「榛名湖畔にて」(短歌)
- 『律動遊戯 をさなごのうた』茂木由子作歌・萩原英一作曲・土川五郎振付 東京女子高等師範学校内 日本幼稚園協会 教文書院 大13・9 (掲載された五編のうち「お日様」「カケク」「凧」は「幼児の教育」に発表されたもの)
- 婦人倶楽部 昭4・11 「子供の寝行儀をよくするお母様方の実験談」無理をさせない工夫
- 婦女新聞 1544 昭5・1・12 「我が家の緊縮生活半年」緊縮の意気
- 婦女新聞 1561 昭5・5・9 「三十年前の私」(回答)
- 写真入り)
- 婦人画報 340 昭8・10 「御婚礼も間近に迫った御令嬢方へ」改良したいことばかりです」(写真入り。「茂木女塾長」とある)
- 婦女新聞 1822 昭10・5・10 「婦女新聞創刊三十五年の思出」(回答。写真入り)
- 婦女新聞 1850 昭10・11・24 「(山脇房子女史の一生(上) 寛い心の方」(談話)
- 婦女新聞 2000 昭13・10・9 「二千号に寄す」(夫が早逝し三児を抱えて塾を開き三年)
- 読売新聞 昭13・8・21朝 「茂木塾長茂木由子氏」物腰にも教養ありです たとへば／玄関・往来で靴紐を結ぶ時」
- \*朝日新聞 昭14・5・31朝 「頼母木市長の区政行脚／診療所設置を希望／赤坂区」(区役所での各方面の代表者と市長の懇談会で「愛婦同区分会長、茂木由子さん」の意見として掲載)
- \*婦女新聞 2159 昭16・10・26 「時間活用」(十一月の興亜奉公日が「生活能率増進の日」と決まる)
- 婦女新聞 2174 昭17・2・15 「婦女新聞に寄せる言葉」(終刊号)
- \*読売新聞 昭17・11・6夕 「統制の趣旨徹底へ／紅四点も加へ警視庁で経済評定」(四一名の代表のうちの一人が茂木由子)
- \*朝日新聞 昭17・11・6夕 「四十一協議員任命／配給円滑を評定」
- \*朝日新聞 昭17・11・6夕 「無くしたい行列や闇／台所代表」は叫ぶ／経済協議会初登場の紅二点、「茂木由子女史の話」(写真入り。茂木由子女史(五九)は茂木女塾、大日本婦人会の理事。隣組をもつと合理的に活用し、配給の回覧

板などお達しめいた文章は止めたい、根本は人情と信用でしよう、という談話)

横瀬多喜 明31・10、常陸国郡珂郡山方村生。大正六年詩人横瀬

夜雨と結婚。三女を生むが昭和八年に長女、翌年夜雨と死別。『近代異色歌人像』(湯本喜作著 洋々社 昭39)に記載あり。『日本女性人名辞典』、『島崎藤村事典』。

婦人倶楽部 2・3 大10・3 横瀬たき子「初めて母と

なりし時の感想」(回答)

処女地 1 大11・4 「妹に送る手紙」

処女地 2 大11・5 「消息(筑波の西より)」

処女地 3 大11・6 「消息(筑波の西より、そ

の二)」

処女地 4 大11・7 「消息(筑波の西より、そ

の三)」

処女地 5 大11・8 「消息(筑波の西より、そ

の四)」

処女地 6 大11・9 「秋草(小品)」

処女地 6 大11・9 「消息(筑波の西より、そ

の五)」

処女地 8 大11・11 「消息(筑波の西より、そ

の六)」

処女地 9 大11・12 「消息(筑波の西より、そ

の七)」

処女地 10 大12・1 「消息(筑波の西より、そ

の八)」

婦人世界 18・5 大12・5 「痛ましき不具の詩人横瀬

夜雨氏と多喜子夫人の愛と美に酔える生活手記」我は愛に生く  
(横瀬夜雨「絶望の後に」と併載。「多喜子さんは藤村門下の才媛」とある)

婦人世界 18・7 大12・7 「母上の身まかるまで」悲

しみの日記より」(生活手記)

女性改造 3・5 大13・5 横瀬たき「応募二篇」田

園の一日」

週刊朝日 10・16 大15・10・3 「島崎藤村氏推薦 身辺」(小

説)

\*週刊朝日 10・15・16 大15・10・1と3 島崎藤村「富本一枝と横瀬  
多喜の作品」(「身辺」の横瀬多喜は近業を二、三雑誌にも掲げ  
て、中村星湖の同情ある批判もある)

婦人倶楽部 昭2・1 横瀬たき「秘録公開」愛

の日記集「花嫁頃の日記」

婦人公論 12・4 昭2・4 「吾が子に書く」

週刊朝日 12・24 昭2・12・4 「女流作家集(小説) 晋

作一家」

女人芸術 1・5 昭3・11 「野ぶり山ぶり」

週刊朝日 15・15 昭4・3・31 「お君」

朝日新聞	昭5・2・14朝	「先生におくる手紙」
婦人	7・12	「神さまが泣くよ」
朝日新聞	昭5・12	
朝日新聞	昭6・3・27朝	「筑波の西より」
婦人倶楽部	昭6・4	「〈新時代の婦人書簡文例〉」
嬉しき手紙懐かしき手紙		
女人芸術	4・6	「赤ペンを入れる帳簿」
家庭	1・5	「断章」(随筆)
婦人倶楽部	昭6・10	「田中さん」
婦人倶楽部	昭8・1	「糸子を偲ぶ(愛嬢を喪へる夜雨氏夫人が涙の手記)」
女性時代	昭8・8	
朝日新聞	昭9・4	「夜雨逝く」
朝日新聞	昭9・4・25朝	「追悼の席に聴く(1)」
朝日新聞	昭9・4・26朝	「追悼の席に聴く(2)」
朝日新聞	昭9・4・27朝	「追悼の席に聴く(3)」
朝日新聞	昭9・4・28朝	「追悼の席に聴く(4)」
朝日新聞	昭9・4・30朝	「追悼の席に聴く(5)」
婦人倶楽部	昭9・6	「〈紅茶の後(名家雑話)〉」
御下賜品		
朝日新聞	昭9・10・28朝	「秋そとろ(1)」
朝日新聞	昭9・10・29朝	「秋そとろ(2)」
朝日新聞	昭9・10・30朝	「秋そとろ(3)」
朝日新聞	昭9・10・31朝	「秋そとろ(4)」
朝日新聞	昭10・6・27朝	「筑波山上『お才』の碑(1)」

朝日新聞	昭10・6・28朝	「筑波山上『お才』の碑(2)」
朝日新聞	昭10・6・29朝	「筑波山上『お才』の碑(3)」
週刊朝日	28・11	「〈秋風に聴く〉朝の筑波」
(写真入り)		
週刊朝日	30・25	「衣ほしや」(写真入り)
朝日新聞	昭11・11・29	「花・女心・鶯——惜春の落筆」
朝日新聞	昭12・5・15朝	「将棋の回想(1)」
朝日新聞	昭13・5・21朝	「将棋の回想(2)」
朝日新聞	昭13・5・22朝	「将棋の回想(3)」
朝日新聞	昭13・5・23朝	「将棋の回想(3)」
*河井醉茗『明治代表詩人』(第一書房)	昭12・4	「夜雨の更生」に、横瀬多喜についての記述あり。
【二】「処女地」以外の他誌への執筆を確認できなかった女性達		
渥美延子	明35・4、	東京市麻布区鳥居坂町生。
処女地	2	大11・5
処女地	4	大11・7
処女地	5	大11・8
処女地	6	大11・9
処女地	7	大11・10
処女地	8	大11・11
上田杉子	明36・11、	東京市麹町区下二番町生。
処女地	2	大11・5
処女地	4	大11・7
処女地	5	大11・8
処女地	6	大11・9
処女地	7	大11・10
処女地	8	大11・11



処女地	4	大11・7	「台所」(小品)	処女地	5	大11・8	「歌」
処女地	5	大11・8	「三宅島の友へ」(手紙)	処女地	6	大11・9	「秋草」(小品)
処女地	6	大11・9	「秋草」(小品)	処女地	9	大11・12	「おもひで」(詩)
処女地	8	大11・11	「柑塙の中」	処女地	10	大12・1	「平安と微笑」(詩)
処女地	9	大11・12	「おとづれ」				
処女地	10	大12・1	「冬が来た日」(手紙)				
上野小枝 明35・4、大分市南新地生。お茶の水高女専攻科在学中であった。				小堀敬子 明36・1、東京市外千駄ヶ谷生。	4	大11・7	「N先生へ」(小品)
処女地	1	大11・4	「友に与ふる手紙」	処女地	2	大11・5	「感想」
処女地	1	大11・4	「ブーニンとバプリン」(手帳)	処女地	3	大11・6	「感想」
処女地	2	大11・5	「幼き日の思ひ出(上)」	中原つる子 (「総目録」に生年月などの記載なし)「処女地」第			
処女地	3	大11・6	「幼き日の思ひ出(下)」	二号「おとづれ」欄に、中原鶴子「沖縄より」を寄せており、沖			
処女地	4	大11・7	「少年」	縄在住と考えられる。			
処女地	5	大11・8	「少年(一)」	処女地	2	大11・5	「歌」
処女地	6	大11・9	「少年(二)」				
処女地	7	大11・10	「少年(三)」	新田包子 明32・4、福島県西白河郡矢吹町生。東京女高師在学中であった。	1	大11・4	「学窓より」(手紙)
処女地	8	大11・11	「少年(四)」	処女地	1	大11・4	「白蟻」(手帳)
処女地	10	大12・1	「夕映の都」	処女地	2	大11・5	「山村より」
奥村みさを 明37・3、東京市四谷区鹽町生。				*時事新報		大11・5・4	「『処女地』を読む」(山村
処女地	2	大11・5	「詩」				

より」は、常識的、浅薄的ではあるが、社会問題に眼を注いでいる。ここを出発点として「社会的正義に目覚めゆく過程」と見れば「最も瞩目に値する作家となるであらう」)

処女地 4 大11・7 「若い女の遺書」  
 処女地 5 大11・8 「病みて」  
 処女地 10 大12・1 「落ちてゐた紙片」

藤田はつ 明22・10 群馬県前橋市細ヶ沢町生。

処女地 9 大11・12 「或る家の出来事(二幕)」  
 (脚本)

藤田茂都子 (「総目録」に生年月などの記載なし)

処女地 4 大11・7 「内省」(感想)

星野耀子 明32・3、東京市赤坂生。日本女子大卒。後、鎌倉円覚寺に蔵六庵を営み、在俗の尼僧として宗教活動に参加。本名、肥塚梅子。『島崎藤村事典』

処女地 2 大11・5 「婦人の服従(一)」(ジヨ

ン・スチュアート・ミルより訳)

処女地 3 大11・6 「婦人の服従(二)」(同)  
 処女地 5 大11・8 「婦人の服従(三)」(同)  
 処女地 6 大11・9 「婦人の服従(四)」(同)  
 処女地 7 大11・10 「婦人の服従(五)」(同)

処女地 8 大11・11 「婦人の服従(六)」(同)  
**本多はる子** 明33・3、東京市麻布区谷町生。本多たけの姉。

処女地 6 大11・9 「町の空」  
 処女地 8 大11・11 「紺暖簾のかけ」(小品)  
 処女地 9 大11・12 「ある日」(小品)  
 処女地 10 大12・1 「小品」

三木栄子 明24・4、大阪市東区修道町生。大阪船場薬種問屋の主婦。水落露石に俳句を学ぶ。本名、森檜栄。『島崎藤村事典』

処女地 1 大11・4 「ある夫人に送る手紙」  
 処女地 3 大11・6 「妹に送る手紙」  
 処女地 4 大11・7 「或る日の感想」(手帳)

処女地 5 大11・8 「回想」

処女地 6 大11・9 「回想(二)」

処女地 7 大11・10 「回想(三)」

処女地 9 大11・12 「回想(四)」

処女地 10 大12・1 「回想(五)」

水上けさを (「総目録」に生年月などの記載なし)

処女地 7 大11・10 「蟻の塔」(感想)

横瀬紀美恵 明33・8、茨城県新治郡土浦町生。横瀬多喜の妹。

処女地 1 大11・4 「大連にある夫のもとへ」

(手紙)

処女地 4 大11・7 「多喜姉様へ」

## 結 び

「処女地」に執筆した無名の女性達の中には、他誌においても活躍を示した人々が相当いたことが明らかになった。無名の執筆者三二名中、他誌への執筆が確認できた人が一七名(同一人物かどうか確認できなかった人がうち三名)、確認できなかった人が一五名である。伊藤英子は「赤い鳥」、大井さち子は「新潮」や「女人芸術」、織田やす子は「婦人」、河井稲子は「読売新聞」や「日本詩人」、田尻稲子は「女性時代」や「塔影」、林真珠は「週刊朝日」、横瀬多喜は「朝日新聞」や「週刊朝日」などにも相当執筆していた。また、埴原久和代が、洋画家として知られた人で、絵だけでなく文章も発表した人であること、三宅せい子が藤村の友人の画家三宅克己の妻であること、茂木由子が歌人としてのみならず、茂木女塾長として知られた人であったことも、目録を作成して明らかになった。これらの人達が新聞などに紹介される時は、写真入りであることも多く、関心のありどころが「女性」にあることが見て取れる。しかしながら、伊東英子が、与謝野晶子や茅野雅子と並ぶ「歌人」と書かれ、林真珠が「女流作家」と書かれるなど、当時の文壇で、現在考えられているよりは高い位置づけを与えられていた人もいたのである。

「処女地」以前から作品や文章を発表していた人には、すでに

作品が注目されていた伊藤英子や、洋画家として注目されていた埴原久和代、新聞や雑誌に短歌を載せ歌集『砂のくづれ』を刊行していた茂木由子などがある。それ以外の、大井さち子、織田やす子、河井稲子、田尻稲子、長坂きくじ、林真珠、本多たけ、三宅せい子、横瀬多喜といった大多数の人達は、「処女地」から作品を発表し始めて、それ以降も他誌に書いた人と考えられる。

「処女地」にほぼ毎号作品を発表した人の中にも、他誌への執筆が確認できなかった人達はいる。女性は結婚すれば家庭の仕事に専念することが道德にかなうことであった時代に、それぞれの事情から早くに筆を執ることをやめた人もいたであろう。また、目録は昭和一三、四年頃までのものとなっていることが多いが、これは戦争が激しくなっていく時期である。「処女地」執筆当時、その多くが二〇歳台であった女性達は、この頃四〇歳台である。生きることに精一杯の日々は、女性達に筆を執ることを許さなかったであろう。また、たとえ書こうとしても、厳しい統制下に戦時色一色となる当時の雑誌などを繰れば、そこにこれらの人達がいかに思いを託す文章を発表する余地の無かったことが見て取れるのである<sup>10)</sup>。

「処女地」に執筆した無名の女性達にとって、書き続けることはどのような意味を持ったのであろうか。発表の場や、個々人の事情の相違を無視するわけにはいかないが、田尻稲子は、晩年に刊行した詩集『一つの灯』(塔影詩社 昭61・10)の「あとがき」に次のように書いている。

(前略)私の胸に、いつからか一つの灯がともって(中略)ああ、灯がともっていると思い乍ら、詩作をつづけてきました。

大正の「処女地」で詩を書きはじめて、昭和になって「女性時代」「塔影」とつづき、河井醉茗先生御一家の御指導によつて、その灯も消えずにきました。島崎先生に「寝言だね」といわれたものをお見せするのは、いささか恥かしいし、失礼とは思いますが、わたしは幼時から大ぜいのお人に支えられて、ここ迄生きてこられたことへの大きな感謝の心、そして自分でもとにかく生きてきたことの証がほしいと思う心、この二つの心の表示として、幾度かためらったのですが、昔からの誌友のお助けで、まとめることになりました。嬉しいことです。おみくじにも、老後はよろしい、望みごと成就と出ていました。有難いことです。

文学史に名を残すといったことは異なる次元で、書くことをあきらめず、書くことで自分を伸ばし続け、書くことを生きる支え、証として生きてきた人の言葉といえよう。田尻稲子は「私の発足」は、「処女地」発刊の頃、「先生のお宅」(藤村の飯倉の家)からであった、そこに私の「ふるさと」「一里塚」がある、とも書いている(「飯倉の先生」島崎藤村氏を憶ふ)、「女性時代」昭18・10。

藤村が「全集」による「思ひもつけぬ収入」で「想ふところを發表する機関」の「少しもない」女子のために発刊を思い立つた<sup>(13)</sup>

婦人雑誌「処女地」は、これらの女性達が文章を書き、発表していく足がかりをつくった。作品が「処女地」以降の他誌に掲載されるためには、執筆者自身の努力はもとより、女性達に発表の場を与えた「女人芸術」や「女性時代」などの雑誌のあったことも、目録の背後には見える。

さらに、「処女地」には「固定読者と見られる者が二千五百人程」<sup>(14)</sup>あった。藤村は、横瀬多喜「身辺」を紹介するにあたって『身辺』の作者が嘗て『処女地』の同人であり、かすかずの筑波便りを書いた人であることは、今でもそれを記憶する読者もあるであらう』と書いた(「富本一枝と横瀬多喜の作品」、『週刊朝日』大15・10・1と3)。「処女地」の「おとづれ」欄には、掲載作品を読んで、子供を守り、夫を慰め励ますと共に「自分をも育てたい」(柴野てふ「向柳原町より」第三号)、「処女地」に「盛られた素晴らしい努力」を見て「やつぱり貧しい努力を続けませう」(金沢やす子「信濃より」第四号)などという手紙が寄せられていた。「処女地」の読者達は、その後、他誌上で「処女地」執筆者の名前を見て、やはり励ましを得たであらう。

「処女地」は、多くの無名の執筆者達が作品を書き始める足がかりとなり、執筆者達自身の努力とまわりの人々の営みによって、その後も執筆者達、読者達を励まし続けた。「処女地」の存在意義は、「処女地」一〇冊の中だけではなく、これらすべての中にある。無名の執筆者達のその後の他誌での活躍を見れば、「処女地」の意義は、これまで考えられてきたよりもずっと大きいといえ

よ<sup>(15)</sup>

〔注〕

- (1) 「処女地」第一〇号扉に、藤村が記した言葉。「処女地」の発行は、『新生』発表（『東京朝日新聞』前篇大7・5～10、後篇大8・4～10、大8・1、12刊）の数年後にあたる。
- (2) 小嶋徳弥（二月の創作）『ある道化役』（『時事新報』大12・2・9）に既にこう書かれている。
- (3) 伊東一夫による「『処女地』発刊の事情とその意義」（『藤村研究風雪』5、昭42・9）、藤村と『処女地』——『処女地』刊行事情とその根本にあるもの（『論集 島崎藤村』平11・10 おうふう）など、佐藤京子「島崎藤村『処女地』考（一）～（六）」（藤一也個人誌「島崎藤村」3～8号、平3・6～平成8・2）、川端俊英「辻村乙未『無花果の村』を読む——『処女地』同人の小説」（『同朋大学論叢』平14・6）などがある。
- (4) 「内外時論」（大8・11）は所在不明のため未見。泡鳴の評は、『岩野泡鳴全集』（臨川書店 平6・10～9・7）には無い。
- (5) 『女性文学の近代』の若見照代氏による「作家案内」、電子文芸館の説明は共に、「処女地」掲載作品についてのものである。
- (6) 『彌生集』（天佑社 大11・3）には「跋」無し。「処女地」第三号（大11・6）「書架」欄掲載「彌生集 河井醉名著、詩集（たい）」を指すと考えられる。
- (7) 「女性時代」と「塔影」の間の戦中戦後の苦難の時代にも、河井醉茗先生（一家（醉茗と島本久恵ら）綴がかりの謄写版の「回章」という綴本が、罹災や疎開で転々とする社友の手に送り続けられ、「家なくば詩に住むべし」と歌われる先生の言葉に励まされた（大野良子「昭和五十年五月七日」、「塔影」昭50・6）。
- (8) 全集未収。宮嶋一郎「天理図書館蔵 島崎藤村自筆本書誌（改稿）」、「島崎藤村研究 八」（昭56・12）で紹介された。
- (9) 同記事に、藤村の亡妻、島崎ふゆ子も回答している。
- (10) 全集未収。浦西和彦「藤村全集 逸文紹介」（『島崎藤村研究 十九』平3・9）で紹介された。
- (11) 「女人芸術」の編集者素川絹子は、「処女地」の編集助手をしていた加藤きぬ子である。
- (12) 戦後の資料には未見のものも多いが、現在までの調査で、実際に執筆が少なくなったという感触を持っている。
- (13) 「全集」とは、藤村全集刊行会版『藤村全集』（大11・1～12）のこと。『処女地』にあつまる若き婦人「談話」（『サンデー毎日』大11・7・16、『藤村全集別巻』筑摩書房、昭46・5所収）。ここに、藤村による執筆者の紹介もある。
- (14) 『雑誌「処女地」廃刊と決す 寿命十ヶ月』（『読売新聞』

大11・11・27朝、談話、全集未収)

(15) 伊東一夫氏は、『処女地』の存在意義は、一粒の麦の芽生えに喩えられるべきであろう』と書いていた(『島崎藤村事典』『処女地』の項)。本稿は、その具体的な検証ともいえる。

#### 〈附記〉

目録の作成にあたっては、『現代日本文芸総覧 上巻・中巻・下巻・補巻』(小田切進編 明治文献 昭43・1～48・8)、『近代婦人雑誌目次総覧 第6・7・9～15巻』(中島邦監修 近代女性文化史研究会編 大空社 昭60・10、昭61・4)、『国立国会図書館所蔵 昭和前期文芸・同人雑誌集成 別巻(索引)』(アイアル デイ企画 発行・編集 平10・4)、『現代詩誌総覧①～⑦』(現代詩誌総覧編集委員会編 日外アソシエーツ株式会社 平8・3～平10・12)、『戦前期四大婦人雑誌目次集成』(ゆまに書房 平14・3～平18・3)及び各新聞雑誌の目録や索引を参照した。目録などには誤りもあり、無名の人物は掲載されないこともあるので、できる限り原紙・原誌などを参照、確認した。

無名の女性達が多く発表したのであるが婦人雑誌や小規模の雑誌には散逸しているものや、見ることの困難な雑誌も多い。現時点で管見に入ったものに限る目録であること、遺漏も少なくないであろうことをお断りし、御教示をお願い申し上げたい。執筆作品の閲覧・複写などについては、本字はもちろん全国の図書館に大

変お世話になった。深く御礼申し上げたい。